

白虎隊（佐原盛純）短歌（竹内蕉龍）

短歌 滅び行く宗社護りてけなげにも

起ちし白虎の花の若武者

南 鶴ヶ城を望めば 砲煙 颯る

痛哭 涙を呑んで 且つ 彷徨す

宗社 亡びぬ 我が事 畢る

十有 六人 屠腹して 僵る

南望鶴城砲煙颯 痛哭呑涙且彷徨  
宗社亡兮我事畢 十有六人屠腹僵

解説 戊辰戦争の時、西軍の攻城に備えて、会津落城の際、飯森山で自刃した白虎隊の壮烈な最期を詠じたもの。

語釈 ※砲煙 砲のつつけむり。 ※颯 吹き上がるさま。  
※痛哭 げげしく大声で泣くさま。 ※彷徨 さまよう。 \*  
宗社 先祖の御霊を祀る処と土地神・穀神を祀る壇。 転じて国家の意。 ※我事畢 自分たち臣下としてのつとめは終わった。 忠節を尽くそうとしても、もはやその対象は無くなった。 ※ひとたびつまずくこと。 ※窮り無き 果てしない。 ※屠腹 切腹。

通釈 南の方の鶴ヶ城を望むと、城は砲火に包まれて黒煙がもうもうと上がっている。 ついに落城、主君も自刃されたかと、一同あまりの無念さに涙をのみ、少年達は刺し違えて死ぬもあり、わが刃に伏すものもあり、ここに全員若き命を散らした。